ホール緞帳の製作　　地元芸術家の参画

◆ぱ･る･るホールの緞帳の特色

原画に描かれている多彩な色合いを踏まえ、「ふるさとの豊かな色彩の季節への思い」を織表現に生かせるよう、企画した。

一見、単調にも見える色面構成だけにそれぞれの色の持ち味を生かし、いろいろなバリエーションの糸種と織組織で表現した。緞帳としての工芸織物の良さを加味し、華やかさ（使用糸種）およびスケール感・質量感（変化織組織）をもって試織した。

緞帳は本来客席からの視認距離はかなり隔たり、手元で眺めることはなく、全面の図柄を一目で見極められる位置も相当離れた距離になる。また、特殊な照明光源下で眺めるものゆえ、それらを考慮して少し明るめで、なおかつボリューム感のある組織を使用し、全体の図柄が引き立つようにした。

経糸には綿糸を、緯糸にはレーヨン糸等を使用している。織組織は４本引き揃えをベースに８本引揃えや、よりボリューム感を出すさまざまな変化織を使用している。

通常、緞帳は裏織されるが、これは一般的な緞帳の織組織の場合で、緯糸を裏に返すのが非常に効率が悪いためである。

今回の緞帳の場合、さまざまな織技法を使用したため、その織肌を目で確認しながら製織する必要があった。効率の悪い緯糸を裏に返す作業があったが、あえて表織した。

また、今回の緞帳の図柄は一見、単調にも見える色面構成だけに、それぞれの色が持ち味となる。その色を生かすためにも、山内ゆり子先生には何度もご指示いただいた。

◆日本における緞帳の歴史

古来、日本では住＝建築空間に織物を用いる習慣は、西欧に比べ少ない方であった。「衣・食・住」の住の語は、織物を思い浮かべ難い分野である。建材は木が主体で、住＝建築空間に関る繊維品は紙（障子・戸・襖）や畳等であった。

織物としてはわずかに座布団程度であり、一般的な住空間とは少し異なった大空間の社寺・御殿・城館に帳・荘厳などが特殊な例として用いられていた程度に過ぎない。

日本の建物では、人と建材の接するものは繊維質の畳・紙が主体だが、西欧の建物では建材が硬質の石・土を主体としたものが多く、人と接する面を和らげるため、内装に織物を用いる習慣が生まれたのであろう。

当初の無地ものが、色変化・図柄を施し「装飾」として発展していったのも、自然な成り行きであったと考えられる。城館・教会堂などにおいて最高の美術織物とされるゴブラン織が多用されているのは、その顕著な例といえる。

西欧においては、壁面に直接図柄を描く大壁画も見られるが、日本では古くは社寺の壁画に散見される程度で「障壁画－障屏画」と総称される分野で、戸襖の絵画・装飾が内装として発展した（狩野派・琳派等）。

「障壁画」の施された戸襖はその用途が会議、儀式、応対、講話など、緞帳とは多少異なるものの、手前の部屋と次の間を区切り、用に応じて左右に開閉され、人の視点の前面にあって飾られることにおいては、緞帳と同様の用途に属するものであり、戸襖に対座する者には、それが開かれるまでの気分の統一の対象としてのものであっただろう。

緞帳は、舞台前面と客席前面を区切って開閉する「用」と、客席の前面を飾る「装飾」の役目を併せ持っている。

舞台幕「緞帳」は、大劇場においては従来、左右から片方に引いて開閉するカーテンのようにたたみ込める裂地による横引き幕が用いられてきた。

日本の劇場、舞台は歌舞伎をその主たるものとしてきたが、江戸末期には設備の充実も完成の域に達し、明治開国に伴い建築も欧風化が進むにつれ劇場様式も西欧の影響を受け、現在に見るプロセニアムアーチ・大舞台の形態が整った。

現在のような上下に開閉する緞帳は、明治12年（1879）、新富座でアメリカのグラント将軍観劇記念に贈られた引き幕を緞帳として用いるようになったのが始まりとされている。その後、図柄も単純なものから多様化するとともに、第２次世界大戦直後の昭和20年代前半までは、緞帳製作方法は布地に直接図柄を描くもの、刺繍を施すもの、色布を切り貼りするアップリケなどの手法で製作されてきた。

原画

昭和20年代後半ようやく台頭してきた戦後の復興気運は、工業生産の伸展とともに、文化的な面でも展開を始めた。いまだ食料事情も低迷する時勢ながら、劇場・ホールの再建も各地で始まる勢いの中で、有識者は観客の視点のポイントとなる緞帳にヨーロッパのゴブラン織と並び日本で最高の美術工芸織物である綴織の手法を採り入れて作成し、好評を得た。

綴織による緞帳は昭和26年（1951）、大阪・朝日会館に吉原治良氏の原画によるものが最初であるが、当時の朝日会館の村山氏、クラレの大原氏などの見識・文化的な物に対する復興期の意気込みも伝わってくる感がある。

続いて産経ホール、毎日ホールなどを始め、東西の劇場・公共ホールにも文化的気運は伝播し、建築家で画家でもあるル・コルビジェ氏、彫刻家のイサム・ノグチ氏などが緞帳作りにデザインから参画するケースもあるなど、工芸織物の一分野が定着していった。

緞帳は特殊な場内空間の雰囲気と照明下で眺めるものであり、場内空間に調和したもの、舞台との関連性を逸脱しないデザインでなければならないが、観客の目を和ませるとともに幕間の休息感、あるいは適度な緊張感から品位をかもし出す内容をもったものが要求される。

劇場・ホールに限らず、今日、多用な用途に催されるステージ付ホールにおいて緞帳は「障壁画」での意義と同様の目的を果たしているものと考えられる。

インテリア・エクステリアとして織物緞帳の存在は、ともすれば硬質の室内空間にあって、客席の前面というその質によるところを得て、内と外のものの区切りと心の区切りの機能を果たす環境造形（エンバイロンメンタル・クラフト）として位置付けられるのが今日の姿であるといえる。

◆緞帳の製作仕様（サイズ、色数など）および製作工程

緞帳寸法：

仕立て上がり

（W）17.50m×（H）9.00m

＝157.5m²

プロセニアム

（W）17.50m×（H）7.90m

使用色数：81色

製作工程：緞帳製作着手から搬入・吊り込みに至る工程の概要は下記の通りである。

1）織企画

効果的な表現のため、織組織、織素材等の決定。

2）原画コピー取り

原画の形態および配色の分解、線描。

3）織下絵制作

2）のコピーを基に、緞帳実寸大拡大図に、配色番号など記入して製織の拠り所とするもの。

4）配色

原画を基に、使用糸による配色組み立て。

5）糸量計算

4）の配色組み立てを基に、各色の製織面積から糸量を算出。

6）染色

かせ染め、浸染および水洗等一連の作業。

7）製織準備（機綜・整経・経糸通し・撚糸・緯巻）

機綜は経糸開口のための綜絖（そうこう）をセットする作業。

整経は必要経糸本数を必要長経糸ビームにセットする作業。

経糸通しは経糸を筬（おさ）および綜絖の目に通す作業。

撚糸は単位糸を必要糸本数に合糸するとともに、均一な撚りをかける作業。

緯巻きは緯糸を杼（ひ）にセットできる管に巻く作業。

8）製織

図柄に合わせ、綴れ織る緞帳製作の主作業。

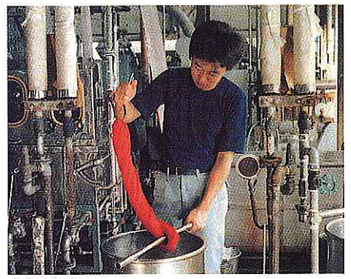
9）表・裏面整理仕上げ

把釣り目かがり作業、裏面緯糸の余分切除作業。

10）防炎・裏打ち加工

緞帳を規定寸法にセットするため

4）配色



6）染色

8）製織

8）製織

8）製織

の地入れ作業を含む。消防当局認定の防炎薬剤の有資格業者による散布および裏面に純綿布を全面接着し、裏打ち加工をする。

11）乾燥

裏打ち面の自然乾燥。

12）縫製仕立て加工（縫製・裾裂取付・下パイプ袋取付・懸吊用テープ取付）

緞帳裏面と化粧裂を合わせ、仕立て縫製加工を施すとともに、下部には図柄とマッチした遮光用の裾裂を取り付ける。

また、下パイプ挿入袋の縫製取付および、下パイプ落下防止用に上下パイプをつなぐ補助ロープを5本取り付けられるよう縫製加工し、上部には緞帳の重量に充分耐える懸吊用厚地綿テープを約250mm間隔に取り付ける。

13）梱包・出荷

輸送に耐えるに充分な梱包および運搬車への積み込み作業。

14）搬入・吊込

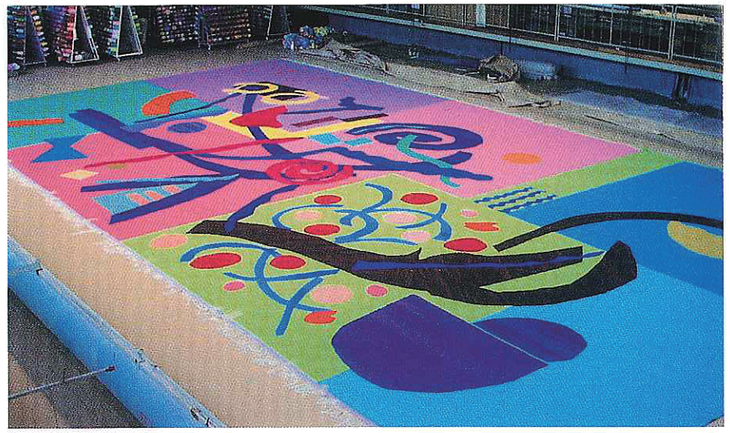
現場での荷降ろしおよび上部バトンへの懸吊用テープの結着。

◆まとめ

地域とともにある郵政の事業であることから、地元・青森のイメージを大切にし、しかも施設の外観および内装とのバランス、多目的に使用されること等々を考慮し、抽象的な中にも、ふるさと青森の豊かな色彩の季節への思いを緞帳に込めてみた。

原画はもとより織物の暖かみ、華やかさを客席の人々に感じていただけるよう、願っている。

㈱川島織物



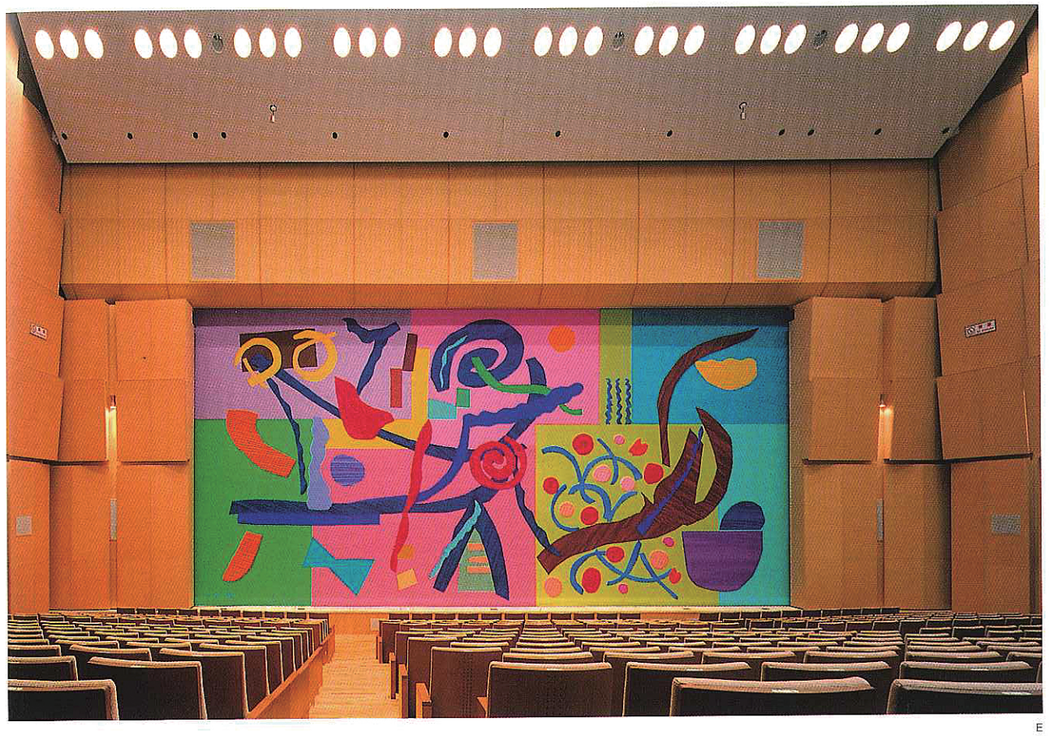
織り上がり

裏面

整理仕上げ

仕立て加工

完成



E

画題　ALL TOGETHER

パリで長い冬の季節を暮らしているとき、私はしばしばふるさと青森の春や夏を思います。鉛をのべたような灰色の空が毎日のようにつづくと、ほとんど反射的に高く青々と晴れ渡る空の下のむつ湾の海を思い、勇壮なねぶたの灯りを思い、八甲田の山々や奥入瀬渓流の緑のトンネルを思い、弘前城の桜のじゅうたんを思い、津軽の西の海に沈むあかね色の夕陽を思い、雲谷の斜面に揺れるコスモスの群生を思い……という具合です。ときには、その思いは恐山の窪の河原で無心に回る風車であったりもします。

雪国の冬の青森にいますと、私は逆に春や夏のフランスに思いをはせます。人はみな、厳しさの中で優しさを求め、寒さの中で暖かさにあこがれ、闇の中に光を探るものなのでしょう。

この度、建設されるホールには、何よりもまず温かさと親しさが基調にあって、その空間に奔放な色彩にあふれた自由で大らかな空気が流れていることが望ましいのではと思います。ひばの木肌に包まれた内装が、自然に温かみや親しみをかもし出すことでしょう。

灰色のパリの空の下で、ふるさとの豊かな色彩の季節への思いを絵筆に込めましたら、こんな作品が生まれました。この抽象的な表現が何を描いているのか、と問われますと、私は「内的な感動を表現したまで」としか答えようがありません。

音楽や演劇などを楽しみに集う人びとの精神的な高揚をやさしくなでる役割を果たすことができればと願うばかりです。

オール・トゥゲザー、みんなでいっしょに！

山内ゆり子